

情報の獲得を示す談話標識について

富 樫 純 一

キーワード：談話標識、感動詞、応答詞、心的操作、語用論

要 旨

いわゆる談話標識(心的操作標識)の中でも情報の獲得を示すと考えられるものが多く見られる。しかし、個別的・逐次的な説明はあるものの、その統一的な分析はあまり行われていない。本稿では、情報の獲得を示す談話標識の中でも、「あっ、えっ、おっ、ふーん、へえ、ほう、はーん、はい、うん、はあ」を取り上げ、これらの統一的な分析を試みる。

従来言われてきたような聞き手への何らかの働きかけを、これらの談話標識に求めるのではなく、談話標識の本質は話し手の心内での何らかの操作(情報処理)を示すものであると考える。このような捉え方を取ることで、独り言や連続発話など、談話標識の様々な使用に対して明確かつシステムティックな説明を与えることが可能となるのである。

0. 問題の所在

談話標識^{*1}をシステムティックに分析していこうとする試みは、近年多くの成果を上げている。談話標識は、命題等の情報^{*2}そのものに関わっているのではなく、

*1 本稿では談話標識という用語を心的操作標識と同じ意味を持つものとして扱う。特に談話(対話)というものを念頭に置いたものではないことに注意されたい。これについては後述する。

*2 「情報」の定義は非常に難しい。そもそも「情報」の単位とは一体何なのだろうか。一つの単語でも一つの情報と捉えられるし、一つの段落あるいは *turn* でも一つの情報として考えていくことが可能だろう。その意味で、ある談話において一つの「情報」を取り出す、というようなことはほぼ不可能に近い。何を、そしてどこまでを一つの情報として捉えるか、という点に関しては恣意的・直観的な感覚に頼らざるを得ない。正確な「情報」の導出については今後の課題である。

情報をどのように処理するのかという、心的操作と深いつながりがあることが明らかになっている。しかし、それは一方で分析の難しさをも明白にした。

いわゆる感動詞と呼ばれる談話標識の類は、談話(音声対話)に多く見られる。書記言語と異なる記述の困難さ、内省の揺れ等、機能記述に関してさまざまな問題点が指摘できる。

その中でも、最大の問題と思われるのが、「聞き手」の存在と認識である。

従来の研究は、対話という点を考慮するあまり、聞き手が存在していることを重要視し過ぎている。例えば、次のような表現を考えてみる。

(1) あっ、飛行機!

(2) (独り言で) あっ、そうか。分かったぞ。

従来、「あっ」には驚きの機能、つまり、話し手の驚きの感情を聞き手に伝達・表明する機能がある、と言われてきた。しかし、これは「あっ」という表現の機能として果たして的確であろうか。(2)のような独り言で用いられた場合、一体、誰に驚きを伝達しているのだろうか。

すなわち、「聞き手」に何かを伝達することを談話標識の機能としていくことの妥当性に問題があるのである。いくつかの先行研究が、この問題を解消すべく、モデルを立てた分析等を試みているが、個別的な検討に終始しているものが多く、談話標識を心的操作の標識として統一的に捉えようとしているものは少ない。

本稿では、感動詞・応答詞類の談話標識を「心内での情報処理^{※3}を示す」ものとして捉える立場に立つ。実際に聞き手がいる対話においても、まず話し手内部での情報処理が初期段階として存在するのである。談話標識が、表面的には対他的な伝達行為を示すとしても、その根底には必ず話し手の心内での情報処理が関わっているのである。つまり、談話標識の本質的な機能として考えられるのは、「聞き手」に向けたインターフェイスの側面ではなく、「心内領域」に向けたインターフェイ

※3 ここでいう「情報処理」は次のように捉える。

(a) 「……情報データそのものには関わらないが、話し手が心内でおこなう、様々な情報データの処理操作(たとえば入出力・登録・検索・計算・編集)……」

(定延・田窪(1995), p.74)

もっとも、情報そのものの定義自体が明確でないため、何をもちて「処理」と呼ぶのかは、今後も検討を要する課題である。

スの側面であると考え^{*4}。

本稿で中心的に扱うのは、心内の情報処理の中でも特に、情報の獲得^{*5}に関わる談話標識である。具体的には以下の表現である。

(3) あっ、えっ、おっ、ふーん、へえ、ほう、はーん、はい、うん、はあ^{*6}

これらはいずれも、何らかの情報・行動・相手の発話に対する反応を示している
と直観的には考えられる。その意味で、情報の獲得という一群の標識と見てよいだ
ろう^{*7}。

本稿での目的は以下の三点となる。

- (a) 談話標識分類に関する指標の設定
- (b) 情報の獲得を示す談話標識の機能記述
- (c) 談話標識の効果について(語用論的フィードバック)

まず次節では、前提となる理論および分類指標の設定を行う。

*4 このような心内のモデル構築の議論に関しては、談話管理理論の一連の研究に負うと
ころが大きい。詳細は先行研究を参照のこと。

*5 「獲得」とは、何らかの情報が入心領域に書き込まれたことを表す。情報は外部から
得られる場合と、知識データベース(長期記憶)から呼び起こされる場合がある。

つまり、ここでいう「獲得」とは、ある情報を自分の知識として長期記憶に書きこ
る処理操作ではなく、その情報を当該談話上で活性化(activation)させる処理操作であると捉
える。いわゆる長期記憶への書きこは、「獲得」とは異なる処理体系を持つと考えられ、
書きこは言語行動とは直接的に関係しないと思われる。

なお、本文中では「獲得」「登録」「書き込み」という表現が用いられるが、特に説明
のない限り、ほぼ同様の意味として扱っている。注意されたい。

*6 もちろん、これらの談話標識には発音および表記上のヴァリエーションが存在する。
しかし、本稿では特に明確な区別はせず、「あ」と「あっ」や、「ふーん」「ふうん」と
「ふうん」等を、同じ談話標識として扱う。イントネーション等、細部の異なりは当
然存在するが、基本的な機能に関してはおおよそ同一であるものとして分析を進める。

*7 これらの談話標識と類似の機能を持つといえる表現「そうですね」「そうなんだ」等
についての分析は対象から外すことにする。

1. 先行研究／理論的前提

1.1. 先行研究

ここでは、主に感動詞について分析を試みているいくつかの先行研究を概観する。

感動詞・応答詞の類を分析対象としているものに、森山(1989a,1996)、田窪(1992, 1995)、田窪・金水(1997)、土屋(1997)、などが挙げられる。それぞれ、独自の視点からの記述を試みている。以下、大まかに見ていく。

森山(1989a)では、応答表現を中心とした談話標識の分析を試みている。談話標識を「談話展開を管理」するための標識と位置付け、話し手聞き手間の関係調整、談話内容の展開の調整としての機能を持つとしている。しかし、「応答」という呼称が示すとおり、その中心的な機能を「聞き手」への方向性を持つものと位置付けている。そのため、ある標識が発せられた時、話し手が情報をどのように獲得したか、という点に関しては深く追求されていない。いくつかの感動詞を「驚き表示の機能」を持つとしているが、それも疑問の余地がある。

一方、森山(1996)では、話し手の情動的側面を的確に捉えている。

- (4)「まず、その意味の中心が対他的な発話であるかどうかという点で、感動詞は二つに大別できる。この簡単な判別基準は、一人で発話できるかどうかという点である。一人でも発話できるものは、伝達の側面が意味の中心なのではなく、情動的側面が意味の中心になっていると言える」(森山(1996), p.52)

感動詞(談話標識)が対他的ではない機能を有することを指摘し、話し手内部の情動の段階性と標識の使い分けの関連を捉えた点は評価できる。それでも「伝達の側面」を完全に排除してはいない。

土屋(1997)は、コーパスを対象として、談話標識を分類・分析している。しかし、コーパスという性格上、作例による内省の微妙な違いを扱うところまでは至っていない。作例によるチェックを含めないと、個々の詳細な記述がうまくいかず、分類に終始する可能性を否定しきれない。本稿での主張の一つとして、これらの談話標識が「独り言」で用いることが可能である、という点がある。この「独り言」の確認は、コーパスでは非常に困難である。実例による傾向性の指摘は有効ではあるが、それだけでは談話標識の基本的な機能を抽出するには至らないと思われる。

最後に、談話管理理論(discourse management theory)の研究として、田窪(1992, 1995)および田窪・金水(1997)を挙げる。いずれも具体的な標識の記述については、

詳細な検討が少なく、個別的な記述のみとなっている。しかし、感動詞等の談話標識を、心内での情報処理状態をマークする、いわゆる「心的操作標識」として位置付けた点は画期的かつ示唆的である。

- (5) 「感動詞・応答詞は、外部からの言語的・非言語的入力があったときの話し手の内部の情報処理状態の現れと考えるとその機能をとらえることができる」
(田窪・金水(1997), p.261)

談話標識の本質的な機能は聞き手とのインターフェイス的な側面ではなく、話し手自身の心内領域とのインターフェイスに存在すると談話管理理論では考えている。例えば、田窪(1995)、田窪・金水(1997)においては、談話標識を入出力制御系と言い淀み系の二種類に分類している。

さて、先行研究の問題点を整理してみたい。

全般的に、表面的、個別的な記述に終始している感があり、談話標識を統一的には捉え切れていない。確かに、話し手の心内の動きを表示する機能を持つものとして、それぞれの研究はアプローチを行っている。それは方向性として間違っていないだろう。しかし、心内領域のインターフェイスとして位置付けてはいるものの、「聞き手」の存在を捨象しきれず、伝達的な側面にとらわれている。

つまり「聞き手」の存在を機能記述に組み込んでしまっているのである。一連の談話管理理論の研究でも、心内領域での情報処理と定義しつつも、「聞き手」の存在、「聞き手」への表明、というような表現効果的な記述が見られる。

この問題を解決するためには、定延・田窪(1995)のように、「聞き手」に向けた態度を別物として、切り離さなければならない(「態度の表出」)。談話標識の機能記述に「聞き手」という要素は不要なのである。

次節では、これを中心的な立場とし、本稿での分析の足がかりとなる理論的前提および心内領域のモデルの設定を行う。

1.2. 理論的前提

いかに「聞き手」を排除した機能記述を試みるか、というのが談話標識分析の重要な観点である。このような視点に立ったとき、話し手内部の心的操作をモニターする、という談話管理理論の考え方は非常に有効となる。特に心内領域を分割するという考えはかなり重要である。

そこで本稿では、この談話管理理論の考え方に則り、情報処理に関する仮想的な

領域を「心的領域」とし、その内部が「バッファ」「データベース」に区分されていると仮定する。おのおのの領域について、「データベース」は情報の格納場所であり、「バッファ」は情報の逐次的な処理を行う作業領域である。そして、基本的な情報の処理操作は、バッファに、データベースにある情報のリンクが書き込まれることで行われると考える^{*8}。

談話標識の本質は「心内領域」に向けられるインターフェイスである。この「心内領域」を仮想的に二分するのである。それにより、心内領域へのアクセスをより細分化することができる。その関係を図示すると以下のようになる。

(6) [データベース ⇄ バッファ] ⇒ 談話標識

これは、Chafe (1987, 1994) の active / semiactive / inactive の考え方も並行的である^{*10}。active な情報を登録する領域が「バッファ」であり、semiactive な情報を登録する領域が「データベース」である。逆に言えば、ある情報が active な属性を持っているならば、その情報はバッファに置かれている、ということである。

いずれにしろ「情報の獲得」(あるいは情報処理全般)は心内領域で起こる現象と規定できる。また、この心内領域には制限を設定することができる。バッファは揮発性の高い、active な領域なので、ある一つのデータが長時間置かれることはない。流れ込むデータを次々と処理する必要があるからである。その点で、データの連続的な処理に適している。逆に、データベースは semiactive な領域であるので、データの連続的な処理は必要がない。つまり、データの処理には少なくとも、(i) バッファへのアクセス、(ii) データベースへのアクセス、の二種類が存在すると考える。次節から、この前提を元に情報獲得を示す談話標識の分類・分析を試みる。

*8 このような区分は主として心理学的な「長期記憶」「短期記憶」の概念に依拠している。より具体的な詳細に関しては、定延・田窪(1995)、田窪・金水(1997)等を参照のこと。

*9 バッファとデータベースに情報そのものが存在するのか、情報のショートカットが存在するのかは、ここでは不問とする。

*10 田窪・金水(1997)では、データベースより深層の位置に「長期記憶」を設定している。これを Chafe(1987)の分類に当てはめると、バッファには active な情報が、データベースには semiactive な情報が、長期記憶には inactive な情報が、登録されていると考えることができる。

2. 情報獲得を示す談話標識 — 「あ」系、「ふーん」系、「はい」系—

本節で扱う談話標識をもう一度挙げる。

(7) あっ、えっ、おっ、ふーん、へえ、ほう、はーん、はい、うん、はあ

これを、以下の三つの基準にしたがって分類する。

a. 発話冒頭以外に位置するか

いわゆる turn 冒頭以外での発話が可能かどうか、という点。逆に言えば、発話末に位置できるかどうかである。

- (a) *飛行機、あっ。
- (b) そうなんだ、ふーん。
- (c) 分かりました、はい。

この基準により、「あっ」「えっ」「おっ」とそれ以外に分類される。

b. 繰り返しの発話が可能か

同一 turn 内での連続発話が可能かどうか、という点。

- (d) えっ? えっ? 何?
- (e) *ふーん、ふーん、ふーん。
- (f) うん、うん。

この基準により、「ふーん」「へえ」「ほう」「はーん」とそれ以外に分類される。

c. 「独り言」で発話可能か

「独り言」で発話できるかできないか、という点。心内発話ではなく、実際の音声として発話可能かどうかを考える。これにより、「はい」「うん」「はあ」とそれ以外に分類される。「はい」「うん」「はあ」は基本的には独り言では用いられにくい。

これを踏まえると、情報の獲得に関わる談話標識は大きく「あ」系、「ふーん」

系、「はい」系の三つに分けることができる^{*11}。

ここでは、ある談話標識が発せられた時点での、情報の存在場所が「バッファ内にあるかデータベースにあるか」というのが、最大の分類指標となる。つまり、「あ」系：バッファ、「ふーん」系：データベース、「はい」系：バッファ+ α 、と考えられるだろう。

以下では、「あ」系、「ふーん」系、「はい」系、それぞれの具体的な機能分析を行う。

2.1. 「あ」系 —バッファへの情報書き込みを示す標識—

本節では、「あ」系としてまとめられる標識群を分析していく。ここに分類される談話標識として、「あっ」「えっ」「おっ」がある^{*12}。

(8)A このタイミングで試験管に塩酸を入れるんだよ。

B1 あっ、そうか。/えっ、そうか?/おっ、そうか。

B2 試験管を持ってと。……あっ、落ちたっ!

B3 *そうか、あっ。/*そうか? えっ。/*そうか、おっ。

(9) あっ、あっ、トラック!

(10) えっ、えっ、トラック?

(11) おっ、おっ、トラック。

これらから、「あ」系は、発話末に位置しない、繰り返し発話が可能^{*13}、という

*11 今回扱うのは、情報の獲得を標示するもののみで、「ええと」「まあ」等の検索標識は対象外となる。ただし、これらの分析にもこの心内領域のモデルは有効であることを述べておく(cf. 定延・田窪(1995)、富樫(2000b,c)参照)

*12 いわゆる「驚き」を表明するものとしては、他に「うっ」「げっ」「わあ」等が挙げられる。これらの「あ」系内での位置、そして機能は別稿に譲る。

*13 ただし用例の評価に関しては、話者によってかなりの揺れが生じる。また、ポーズやイントネーションの違い、あるいは文脈の設定の異なりによっても、その内省は激しく変化する。これは、語用論的に解釈ができるかできないか(無理矢理、理解するかしないか)の違いであると捉えられる。3節を参照されたい。

感動詞類の内省判断では、付加的な要素の排除がかなり困難なため、感動詞そのものの純粋な許容度を検討することが難しい。用例の評価方法については改めて検討する必要があるだろう。

共通性が見て取れる。

「あ」系は、同一 turn 内での繰り返しが可能である。これは、バッファの性質に依存しているためであると考えられ、つまりは、「あ」系標識発話時の情報の書き込み場所がバッファということになる。言うなれば、情報獲得のまさにその瞬間を示す機能を持つのである。つまり、新規の情報がバッファに書き込まれたことを標示しているのである。

また、(12)~(14)のように「あ」系は独り言での発話が可能である。

(12) あっ、忘れ物!

(13) えっ、ウソ!

(14) おっ、新車じゃん。

これらはいずれも、特に「聞き手」を想定しない状況での発話として認識される。したがって、従来言われてきた、驚きを表明する、といった伝達行為は副次的なものに過ぎなくなる。つまり、独り言で「あ、そうか」と発話した時、その驚きを一体誰に表明しているのか、という問題が生じるため、「驚き」を一次的な機能として位置付けるのはかなり不都合があることになる。それよりは、「あ」系の一次的な機能はバッファへの情報の登録を示していると記述したほうがシステムのにも簡潔である。

一次的な機能として聞き手が不必要であるという点は、聞き手がいる状況であっても、対他的な伝達が明確ではない例があることから説明できる((16))。

(15)(考え事をしていて) あ、そうか。分かったぞ。

(16)A ねえ、この操作方法、教えて。

B うん。このレバーを右に、……あ、違う。左に回して、……。

むしろ「驚き」というよりは「気付き」のほうが、伝達的な効果としては的確かもしれない。しかしいずれにしても、「あ」系標識は情報を得たことのみをマークするのであって、その情報が話し手にどういう影響を与えたかという点については関与しないのである。

「あ」系の機能は次のように記述できる。

(17)「あ」系の機能：バッファへの情報書き込みという処理操作を示す

つまり、情報を単に獲得(書き込み)したことを示す操作標識なのである*14。単純な獲得とは、情報獲得のもっとも初期段階である*15。つまり、単に「情報獲得」といっても、一律・平板な処理ではなく、その内部はいくつかの段階に分かれているといえるのである。

さて、「あっ」「えっ」「おっ」が同一の機能を有しないのは自明である。表現が異なれば、そこには何らかの異なった機能があるはずである。次に、この「あ」系内の標識の振る舞いの異なりについて検討してみる。次の例を見られたい。

(18) えっ、えっ、トラック?

(19) おっ、おっ、トラック。

(20) (待ち合わせの状況) おっ、来たな。/??あっ、来たな。/??えっ、来たな。

「えっ」「おっ」ともに繰り返しの発話が可能である。田窪・金水(1997)では、「えっ」「おっ」をそれぞれ、「えっ」: 矛盾・関連性の低い情報の受け取りを表明する、「おっ」: 予測を越えた新規情報の登録を表明する」としている。情報の矛盾・予測外の情報ということは、その時点で既に比較対象となる情報が用意されて(バッファに置かれて)いたわけで、本質的に新規ではない。つまり、「えっ」「おっ」発話時には、新規に得た情報に対する比較検討という情報処理プロセスが完了している。

さらには、「おっ」に関しては、予想外というよりは、肯定的な比較検討処理を行ったというニュアンスが強い((20))。検索元の情報との一致率が高い場合は「おっ」で、逆に一致率が低い場合には「えっ」となるといえる。もちろん、「あっ」には比較処理そのものが存在していない*16。

「えっ」「おっ」は獲得した情報に対して異なる観点からの一致率計算が可能であるため、繰り返しの発話が許容されるのであろう。見かけ上は繰り返しであるが、

*14 話し手自身にとっては、獲得処理を明示的に示すことで次の処理段階への以降をスムーズにしようという役割もあるかもしれない。定延・田窪(1995)を参照。

*15 森山(1996)では、何らかの未知の事態や情報に遭遇する「遭遇系」を一次系・二次系と分けている。一次系は最初に未知のものと遭遇した反応であり、それを表示する感動詞として「あ」系類の標識を挙げている。

*16 「発見・思い出しの「あ、あっ、はっ」」には「特に、知識データとの矛盾、関連性の不十分さを表明するという機能はない(田窪・金水(1997))」。

それぞれの計算プロセスは(一致率の再計算による繰り返しだとしても)独立した処理として切り離される。

「あ」系のそれぞれの機能は次のようにまとめられる。

- (21) 「あっ」の機能：バッファにない新規情報を獲得したことを示す
- (22) 「えっ」の機能：バッファにある情報と新規獲得情報との一致率が低いことを示す
- (23) 「おっ」の機能：バッファにある情報と新規獲得情報との一致率が高いことを示す

「あ」系はいずれも「バッファへの情報書き込み」を示しており、獲得した情報がバッファ内からは出ていない段階での処理(「あっ」は単純獲得、「えっ」「おっ」はバッファ内での比較検討)を標示している点では共通している。

2.2. 「ふーん」系 —データベースへの書き込みを示す談話標識—

ここでは「ふーん」系の類の談話標識を見ていく。これらもまた情報の獲得を示す。

- (24) A 右に曲がったら、茶色のビルが見えてきますよ。
B ふーん、そうか。／へえ、そうか。／ほう、そうか。
- (25) A 空が青いのは、青の波長が関係してるんだよ。
B ふーん、なるほど。／へえ、なるほど。／ほう、なるほど。
- (26) A 海が青いのは、青の波長が関係してるらしいよ。
B ふーん。／へえ。／ほう。

「ふーん」「へえ」「ほう」はいずれも新規の情報の獲得を標示しているといえる。しかし、「ふーん」系には「あ」系とは異なる制約が見られる。次の例を見てみる。

- (27) ??ふーん、ふーん、そうなんだ。
- (28) ??へえ、へえ、そうなんだ。
- (29) ??ほう、ほう、そうなんだ。

「あ」系とは異なり、連続発話は非常に許容度が低い。このことは、連続処理が必要となるバッファの性質とはかみ合わないことを意味する。

また、さらに「あ」系と異なる点として、発話末に位置することが可能である点が挙げられる。

(30) やっぱりね、ふーん。

(31) なるほど、へえ。

(32) そういうことなんだ、ほう。

(33) A 右に曲がったら、茶色のビルが見えてきますよ。

B そうか、ふーん。／そうか、へえ。／そうか、ほう。

発話末に位置することが可能ということは、直接的なバッファの書き込みではないということである。そこには、単純な登録操作ではない、二次的な処理が存在するといえる。つまり、これは、情報をまっさらな状態で獲得したことを示すのではなく、もう一段階経た上での処理を示すものと考えられる。

したがって、「ふーん」系の本質的機能を次のように記述できる。

(34) 「ふーん」系の機能：情報をデータベースへ書き込んだことを示す標識。バッファに情報を残さないことで、active な性格を付与させない

つまり、獲得した情報をバッファに残さず、一気にデータベースに移すことで、その情報の活性(activation)を低下させるのである。その結果として、「情報を適切にデータベースに格納した」という合図にもなり、「得た情報を active なものとして捉えていない」という表明にもなるのである^{*17*18}。

*17 森山(1989a)では「ふーん」系の類を、

(a) 「応答者(話し手)にももとの情報がない場合の肯定的反応である納得表示」
(p.79. 括弧内は筆者)

として、いわゆる「驚き」の機能を持つとしている。しかし、

(b) ふーん、やっぱりね。

のような発話が可能なところを見ると、得られた情報が話し手にとって未知か既知かという区分は関わってこないと思われる。

*18 田窪・金水(1997)でも「ふうん」「へえ」「ほお」を、「その評価は肯定的な場合も否定的な場合もある(p.271)」としている。これはまさに、適切に格納したと解釈された場合は肯定的になり、active でないと解釈された場合は否定的評価になる、という並行性を示している。

「ふーん」系の本質はまさにこれだけに集約されるといえる。これ以外はすべて付随的・副次的な効果に過ぎない。

もう一つの例で確認する。

(35) A 今日はいいい天気ですね。

B ??ふーん。

(36) A 今日はゴルフ日和ですね。

B ふーん。

「ゴルフ日和」という情報は、話し手の知識状態によっては、全く active になり得ないものであり、即時にデータベースに移し、活性を下げる事が可能である。しかし、「いい天気」という情報はかなり日常的・一般的であり、話し手の知識状態に関わらず、active になる可能性が高い。それを見越して、「ふーん」により活性を下げるのは非常に非効率であるといえる。逆に言えば、active になりやすい情報に対して「ふーん」系が用いられにくいのは、「ふーん」系がデータベースへの書き込みをマークしていることの強力な証左となる。

また、「ふーん」系は独り言で発話可能である。したがって、その本質は心的操作のインターフェイスにあることは間違いない。これもまた「聞き手」を切り離せるのである。

(37) (返されたテストの答案を見て独り言で)

ふーん、こんなもんか。

(38) (新しい店ができているのを見て独り言で)

へえ、こんなところにお店できたんだ。

次に、「ふーん」「へえ」「ほう」の異なりについて見てみる。

(39) A このマンガ、どう?

B ふーん、おもしろいね。/ふーん、おもしろくないね。

(40) ふーん、興味ないね。/??へえ、興味ないね。/??ほう、興味ないね。

(41) ふーん、興味深いね。/へえ、興味深いね。/ほう、興味深いね。

上の例の差異から、「ふーん」は中立的な情報書き込みを示すといえる^{*19}。しかし、「へえ」「ほう」に関しては若干振る舞いが異なる。「へえ」「ほう」は情報に対して肯定的な属性を付与する書き込みといえる^{*20}。「ふーん」はその点には関与していないのと対照的である。したがって、「へえ」「ほう」は、「active なものとして捉えていない」という解釈ではなく、「適切にデータベースに格納した」という解釈が得られやすい。

また、「ふーん」「へえ」「ほう」は同一 turn での繰り返しに差異が見られる。

(42) ふーん、そうなんだ、ふーん。

(43) ?へえ、そうなんだ、へえ。

(44) ??ほう、そうなんだ、ほう。

(45) A ええっ? な、なにもしてないよ。勝手に消えちゃったんだよ。

B1 ふーん、勝手にねえ、ふーん。

B2 ?へえ、勝手にねえ、へえ。

B3 ??ほう、勝手にねえ、ほう。

(42)は文脈の設定によっては発話可能である。単純な連続繰り返しだが、「ふーん」「へえ」「ほう」いずれも非常に困難なものに対して、(42)~(45)のように、同一 turn 内での非連続な複数回生起の場合、その許容度には差が生じる。「ふーん」「へえ」は許容されやすい。

おそらく「ふーん<へえ<ほう」の順で書き込み時の中立性が弱くなっていくため、「ふーん」のほうが繰り返しによる語用論的效果が表明されやすいと考えられる。まとめると、「ふーん」「へえ」「ほう」のそれぞれの機能は以下ようになる。

(46) 「ふーん」の機能：獲得した情報がデータベースに書き込まれたことを示す

(47) 「へえ」の機能：獲得情報に肯定的属性を付与してデータベースに書き込んだことを示す

(48) 「ほう」の機能：獲得情報に強い肯定的属性を付与してデータベースに書き込んだことを示す

*19 もちろんアクセント・イントネーションが異なることで許容度に差が出ることを指摘しておく。

*20 あらかじめ、切り分けられた領域に情報を振り分けるイメージと捉えられたい。

「ほう」が繰り返されにくいのは、一回の発話で強い属性が与えられるからであり、その属性付与をもう一度行うことが非常に冗長だからである。「へえ」と「ほう」の違いはその強弱にあるといえる。

最後に「ふーん」系に属すると考えられる「はーん」について考えてみる。

(49) A あそこのお店、つぶれたらしいね。

B はーん、どおりで。

(50) ??はーん、興味ないね。

「はーん」は、非常に微妙であるが、「へえ」や「ほう」と同様に、肯定評価(属性付与)を伴ったデータベースへの書き込みと考えられる。

2.3. 「はい」系 —情報の linking を示す談話標識—

ここでは「はい」系について分析していく。「はい」「うん」「はあ」は典型的には応答詞として機能していると考えられている。

(51) A 明日の都合はよろしいですか？

B はい。／うん。／はあ。

これを見ると、「はい」系はよりシステムティックに「相手の発話を獲得する(獲得したことを相手に伝達する)」標識であるという直観が働く。しかも、「はい」系は独り言としては非常に用いられにくいことも、いわゆる対他的な伝達標識として機能していることの傍証となっていると思われる。

しかし、絶対に独り言での発話が不可能というわけではない。以下の各例は独り言の発話としては、おそらく許容度が高いと思われる*21。

(52) (一人で論文を読みながら) うん、うん、なるほど。

*21 (52)~(54)のように繰り返しがあったほうがより自然ではある。かといって、単数回の発話が全く不自然になるというわけではなく、

(a) うん、うまい!

(b) はい、終わり、っと。

のような独り言も可能である。

(53) (一人で論文を読みながら) はい、はい、なるほど。

(54) (一人で論文を読みながら) はあ、はあ、なるほど。

つまり、応答以外の状況での使用も可能なのである。独り言が可能ということは、「応答(聞き手への伝達)」が機能していないということであり、では、この場合の「はい」系の本質は何か、という疑問に到達する^{*22}。

本稿では、従来、応答詞と位置付けられている「はい」系もまた、その本質は心的操作標識であるという立場を取る。では、具体的にはどのような情報獲得操作をマークするのであろうか。

「はい」系は、「あ」系、「ふーん」系それぞれと共通した性質を有している。まず、独り言で使用可能な点、そして連続発話が可能である点は「あ」系と同じである。

(55) はい、はい、そういうことね。

しかし、「ふーん」系と同様に発話末に位置することが可能であり、同一 turn 内の非連続な発話も可能である。

(56) …と、こうなるわけです、はい。

(57) うん、なるほど、うん。

このような「はい」系の諸特徴を踏まえると、前節までに見てきた「あ」系・「ふーん」系の情報処理的観点から、「はい」系標識の発話時にはバッファとデータベース両方の領域にアクセスしていると考えられることができる。つまり、バッファデータベース間の、領域をまたがった情報処理操作なのである。

「はい」系における情報とは何であろうか。独り言での使用や相づちの用法を考えてみると、いわゆる命題的な情報ではなく、情報間のつながり(linking)としての

*22 もちろん、逆に応答の機能からの派生として考えていく道筋もあると思われる(例えば、森山(1996)の「応答詞の情動的感動詞用法」)。しかし、本稿での目的はあくまでも、心内領域のインターフェイスに標識を位置付けることにある。したがって、「応答機能→独言用法」という派生メカニズムではなく、「心的操作標識機能→応答用法」という派生が起こっているものと捉える。こうすることにより、「あ」系および「ふーん」系も含めた統一的かつ経済的な機能記述が可能となるのである。

情報と考えられる。ある与えられた情報に対し、計算を行うことで、前後の文脈・状況・対他的な関係との linking を形成する。これが「はい」系での情報獲得なのである。

「はい」系発話の背後で行われている処理は、バッファとデータベース間を行き来することによる、様々なリンクの追加なのである。

そこで、「はい」系の機能を次のように記述する。

- (58) 「はい」系の機能：領域間のデータのやりとり(計算処理)による情報(linking)獲得を示す。それにより獲得した情報はバッファに置かれるため、active な属性となる

これは、「あ」系、「ふーん」系との比較が傍証となる。次の例を見られたい。

- (59) A これ、やつといて。
 B あ、はい。/*はい、あ。
 (60) A この画面で左のボタンを押して……。
 B *はい、ふーん。/*ふーん、はい。

「はい」系でマークされる情報処理は、「あ」系のような情報獲得とも、「ふーん」系のような情報獲得とも異なる。

「あ」系標識より後ろにしか位置できないので、「あ」系のような情報獲得を示すとは考えられない。しかし、「ふーん」系標識とは同一 turn 内での共存が非常に困難となるため、「はい」系によって処理される情報は semiactive な属性を持つものではないことになる。つまり、「はい」系での情報は、何らかの処理後でかつ active な属性を持つということになる。ここでの処理とは linking なのである。

また、独り言での使用が、可能とはいえ非常に困難、特殊な状況に限られてしまうのは、「はい」系の持つ「聞き手」に対する応答の側面が強く現れているからであろう。が、その使い分けの根本にあるのは、どのように情報を獲得しているか、という情報処理の方法的相違なのである。

最後に、「はい」系内の異なりについて検討してみる。特に「はい」と「はあ」の違いについて考えていく。以下の例を見られたい。

- (61) (投げやりな態度で) はい、はい。(下降イントネーション)

(62) (投げやりな態度で)??うん、うん。

(63) (投げやりな態度で)??はあ、はあ。

(64) A それでえ、彼ったらあ、(どーたらこーたら……)。

B (どうでもよい感じで) はい、はい。/??うん、うん。/??はあ、はあ。

この例のように、ポライトネスが関わってこない状況での許容度の差が認められる。この点を踏まえると、「はい」と「うん」「はあ」との異なりは、より高度な推論を経たかどうかという点に行き着くと思われる。つまり、「はい」系の異なりは、ポライトネスの差ではなく、処理による情報の link 形成をどれだけ行っているかどうかの差であると考えられる。

上の「はい」の例は、相手の発話の語用論的な含意まで正確に理解して初めて可能となる。つまり、単なる「生返事」としての利用はできないのである。

「どうでもいいような態度」を表明する場合には、「はい」のみが用いられる。これは、おそらく、「はい」よりも「はあ」のほうが、link 形成の量(データベースへのアクセス頻度)が少なくなっているからであると思われる。心内において、ある情報に対する linking が少ないということは、それに基づいた推論処理が正確には行えないということになる。「どうでもいい」という態度をとるためには語用論的な含意までの正確な処理が不可欠である。その正確な処理と「はあ」の機能とが合わないために、「はあ」は許容度が低くなるのであろう。これは、先行研究において、「相手の主張を完全には受け入れていないことを示す」(田窪(1992))、「応答留保にもつながると思われる」(森山(1989a))と論じられていることと同様である。

(65) A この説明で分かりましたね?

B はあ、はい。/*はい、はあ。

この例のように、「はい」と「はあ」の語順は入れ替えができない。これは、量的に多くの link が形成された直後に、link が少ないことをマークする「はあ」は位置できないことが原因となっていると考えられる。

この分析から「はい」「うん」「はあ」それぞれの機能は次のようになる。

(66) 「はい」の機能：semiactive な情報に多く link していることを示す

(67) 「うん」の機能：semiactive な情報への link が中程度であることを示す

(68) 「はあ」の機能：semiactive な情報への link が少ないことを示す

「はあ」は「はい」「うん」と違って、文頭以外には位置しない、という制約が認められる。つまり、より多くの情報を得てしまえば、それだけ link が多く形成される可能性が高くなる。そのため、link が少ないことを示す「はあ」には「はい」「うん」より多くの制約があると考えられる。

また、「はい」「うん」「はあ」はいずれも相づちとして用いることができる。同一談話に「はい」「うん」「はあ」の相づちが混在することが可能である。この使い分けは、スピーチレベルも関わってはいるが、その本質は「情報に対してどれだけ semiactive な情報を link できたか」という差が根本的な原因となっているといえる。

3. 語用論的フィードバック —機能と効果(解釈)の分離—

これまで、さまざまな情報獲得を示す談話標識を見てきたが、これらの内省判断には話者により揺れが生じてくる場合がある。さらには、情報獲得という本質的な機能が明確に確認できないような例もある。

日常の談話において、談話標識が発話されたからといって、必ずしも常にその背後で何らかの情報処理が行われているわけではない。以下、定延・田窪(1995)から引用する。

(69) 「…話し手は、「ええと」や「あの(-)」を使いながら、実際に演算領域確保や言語編集をおこなっているとは必ずしも限らない。話し手がおこなっているのは、あくまでそうした態度の「表出」にすぎないからである」

(定延・田窪(1995), p.87)

つまり、談話標識を使用するに当たって、心的操作という態度の「表出」のみを示す場合があり、実際には演算処理をしていないが、そのような態度を示すことで会話の円滑な進行を促す機能も持つ。定延・田窪(1995)ではこれを「態度の表出」と呼んでいる。

ある談話標識の発話の背景には、何らかの情報処理過程が存在している。その情報処理過程の存在を示すのが談話標識の本質的な機能であると考えられる。しかし、実際にはそのような存在を肯定できる確証がない発話も当然ありうるのである。

この場合、何らかの情報処理過程を積極的に見出すのではなく、その標識と関連付けられた処理は行われていないと仮定する。そして、そこに認められるのは、談話標識を用いることで逆に聞き手に対して、処理過程の存在を提示し、聞き手の解

釈を要求する行動であると考え。それぞれの談話標識に関連した情報処理を「聞き手に解釈」させることで、コミュニケーション上さまざまな効果を得ることができる。このような、談話標識の聞き手へ向かう用法を本稿では語用論的フィードバックと呼ぶ。

以下、例に即して語用論的フィードバックによる効果を確認する。

(70) あーっ、私のお菓子、食べたー！

(71) A これからテストをします。

B えっ!?

(72) A 明日は新製品の発売日だよ。

B ふーん。

(73) A 僕は犯人じゃありませんよ。

B ふうーん。

A なんですか、その疑いの眼差しは。

(74) A ほくがここまで成功した秘訣はですね、……。

B(どうでもよい感じで) はい、はい。もうその話は聞き飽きましたよ。

「あっ」は「バッファにない情報の獲得」を示す。それは話し手にとって「驚き」という感情を伴う場合がある。これは逆に「驚き」を伝達するために「あっ」発話が可能ということである。(70)は「情報獲得」をメインに示しているのではなく、「驚き」の感情をメインに(聞き手に向かって)示していると捉えられる。

「えっ」は「情報の一致率が低い」ことを示す。これは結果として、話し手に「意外」の感情を誘発させる。(71)は単純に一致率の低さをモニターしただけではなく、誘発された「意外」あるいは、「意外」からさらに誘発される「驚き」の感情を示すことになる。

「ふーん」の場合は「興味がない」態度(=active になっていない)を示す結果となる((72))。あるいは、話し手のデータベースに適切に格納された、という「ふーん」系のもう一つの機能的側面を示すことで、その背後にある計算可能性(つまり「自分はすべて分かっている」こと)を表出することもできる((73))。このような態度を表出するためには、実際の情報獲得という処理操作は必ずしも必要ではないのである。そのような態度・感情を相手に示すことができればよいのであって、そこに本来あるべき情報処理操作を認めなくともよいのである。

「はい」系は、実際には応答詞としての利用が大多数を占めている。しかし、(74)

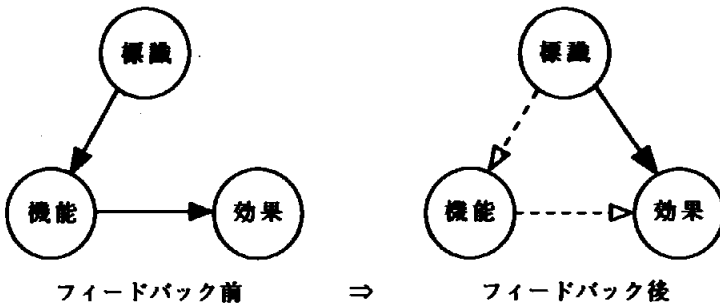
のような発話は逆に、「はい」の機能からの語用論的フィードバックによる効果のほう前面に現れていると考えられる。また、実際には相手の発話をちゃんと聞いていない場合でも、「はい、はい」と相づちを打つことで、相手にきちんと聞いているという態度を示すことになるのである。

さらに言えば、「はい」を用いることで、linking が多量であるという態度を示し、「より詳しくあなたの発話を推論処理して獲得しています」という効果を生み出し、それが結果として副次的にポライトネスを誘発すると考えることも可能である。

以上から分かるように、談話標識の発話にはさまざまな効果が派生的に付随する。さらには、談話標識の機能が捉えられない場合もある。(73)の「ふうーん」などはその際たる例である。つまり、実際に心内で書き込み(新規情報の獲得)があったかどうかは分からないが、伝達したい効果と結びついている標識を用いることで、心内の処理とは無関係に効果のみを表出することが可能なのである、と考えることができる。この語用論的フィードバックが、さまざまな効果を派生させる要因となり、かつまた、用例の解釈の困難さを作り出す要因ともなるのである。

語用論的フィードバックとは、標識の本来の機能を潜在化させ、語用論的效果が顕在化した状態である。そして、語用論的效果のみを会話参与者に伝達するために、本質的な機能とは関わりがないままに談話標識を用いるのである。この関係を図示してみると次のようになる。

(75) 語用論的フィードバック



つまり、従来言われてきた、談話標識の本質の「伝達のインターフェイス」的な記述は、この図式で言えば、単なる効果あるいは聞き手による解釈に過ぎないということになる。いわゆる表現効果(驚き・気付き・納得・応答等)としての「機能」

と、本質的(心内領域インターフェイス的)機能は切り離されるのである。談話標識の本質は、話し手の心内での情報処理を標示するのみであって、対内的・対外的な効果はまた別のプロセスになるのである。そして、その関係性は語用論的なフィードバックによって二次的に結合され、それがあたかも本質的であるかのように振る舞っているに過ぎないのである。

4. おわりに

談話標識を扱う上で、「聞き手」という存在は本質的機能記述のためには除かれなければならない。今回は獲得を示す談話標識に関してそれが可能であることを示すことができた。もちろん、すべての心的操作を標示する談話標識にこの分析が当てはまるかどうかは不明である。また、談話標識以外の表現においても当てはまるかどうか、それらに関しては後の分析を待たなければならない。しかし、このようなシステムティックな関係を談話標識の背後に構築することの有効性は十分に示し得たと思われる。

参考文献

- 有田節子・田窪行則(1995)「日本語の提題形式の機能について」『人間科学』1 九州大学文学部人間科学科
- Chafe, Wallace L.(1976) Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view. *Subject and topic*, ed. by Charles N. Li, Academic Press.
- Chafe, Wallace L.(1987) Cognitive constraints on information flow. *Coherence and grounding in discourse*, ed. by R. Tomlin, John Benjamins Publishing Company.
- Chafe, Wallace L.(1994) *Discourse, Consciousness, and Time*. The University of Chicago Press.
- Clark, Herbert H. and Marshall, Catharine R.(1981) Definite reference and mutual knowledge. *Elements of discourse understanding*, eds. by A. Joshi, B. L. Webber and I. A. Sag, Cambridge University Press.
- 金水敏(1992)「談話管理理論からみた「だろう」」『神戸大学文学部紀要』19
- 金水敏・田窪行則(1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展3』日本認知科学会編：講談社
- 金水敏・田窪行則(1997)「談話管理理論に基づく「よ」「ね」「よね」の研究」『音声による人間と機械の対話』堂下・新見勉編：オーム社

- 北川千里(1977) 「「はい」と「え、」」「日本語教育」No.33
- 森山卓郎(1989a) 「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1 大阪大学文学部日本学科(言語系)
- 森山卓郎(1989b) 「コミュニケーションにおける聞き手情報 —聞き手情報配慮非配慮の理論—」『日本語のモダリティ』仁田・益岡編：くろしお出版
- 森山卓郎(1996) 「情動的感動詞考」『語文』65 大阪大学国語国文学会
- Sacks, Harvey., Schegloff, Emanuel A. and Jefferson, Gail(1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50.
- 定延利之(2000) 「認知言語論」大修館書店
- 定延利之・熊谷吉治・菊田修司(1999) 「〈用語解説〉旧情報と新情報」『文法と音声Ⅱ』音声文法研究会編：くろしお出版
- 定延利之・田窪行則(1995) 「談話における心的操作モニター機構 —心的操作標識「ええと」「あのー」—」『言語研究』No.108
- 田窪行則(1989) 「文脈理解—文脈のための言語理論」『情報処理』Vol.30, No.10
- 田窪行則(1990a) 「対話における知識管理について —対話モデルからみた日本語の特性—」『アジアの諸言語と一般言語学』崎山・佐藤編：三省堂
- 田窪行則(1990b) 「対話における聞き手領域の役割について —三人称代名詞の使用規則からみた日中英各語の対話構造の比較」『認知科学の発展3』日本認知科学会編：講談社
- 田窪行則(1992) 「談話管理の標識について」『文化言語学 —その提言と建設』三省堂
- 田窪行則(1995) 「音声対話の言語学的モデル —談話管理標識としての感動詞」『情報処理』Vol.36, No.11
- 田窪行則・金水敏(1996) 「複数の心的領域における談話管理」『認知科学』Vol.3, No.3
- 田窪行則・金水敏(1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』音声文法研究会編：くろしお出版
- Takubo, Y. and S. Kinsui(1997) Discourse management in terms of mental spaces. *Journal of pragmatics* 28.
- 富樫純一(2000a) 「非文末「ですね」の談話語用論的機能 —心内の情報処理の観点から—」『筑波日本語研究』5 筑波大学芸文・言語研究科
- 富樫純一(2000b) 「「ま」の談話機能」平成12年度筑波大学国語国文学会発表要旨
- 富樫純一(2000c) 「「え？」と「は？」の談話機能」平成12年度国語学会秋季大会発表要旨
- 土屋業穂子(1997) 「感動詞の分類—対話コーパスを資料として—」平成9年度国語学会春季大会発表要旨
- 山森良枝(1997) 「終助詞の局所的情報処理機能」『コミュニケーションの自然誌』谷泰編：新曜社

(2001年6月28日 受理)